

東日本大震災
— 貴重な経験

← スカーレット・コーネリッセン

二〇一二年一〇月から二〇一三年三月までの六カ月間近くを私はアジア経済研究所の客員研究員として過ごした。始めて日本を訪れたわけではないが—実際、公私ともに日本には何度も訪れた—今回の日本滞在が最も長期にわたるものであった。この間、千葉県幕張に滞在した。研究期間の後半は都心に移転した。

私がアジアで行う研究の性格からいって、いろいろな機関の人びとや様々な仕事・活動に携わっている人びとと関わる機会をもてた。私の研究テーマは日本企業のアフリカとの関係（投資）そしてその効果というものであったので企業の代表者や役員とのインタビューに多くの時間を費やした。その関係で何度か、ある特定の企業の製造の現場を見学させてもらうことができた。そのうち、日本の大手鉄鋼業二社のプラントを見学したときの

印象は忘れられないものだった。二社ともに千葉県に立地している。

だが、日本での研究生生活で最も心に残ったのは研究所の

カウンターパートと岩手県を訪れたときであった。二〇一一年三月の地震と津波（3・11と呼ばれる）の被害を受けた所も訪問した。岩手県の三箇所—大槌町、遠野、花巻—を訪れた。大槌町は海沿いにある小さな漁村である。津波による被害は甚大であった。住宅区域、商業地区の多くが、そして漁業施設の大部分が津波で破壊された。津波で多くの犠牲者がでた。そのなかには町長をはじめ自治体の職員が多くが含まれている。町への打撃は深刻なものであり、なお悪化している。これは町の主たる収入源である漁業がほとんど壊滅的な被害をこうむったからである。我々は、災害が起きてから二年近くたって訪れたのだが、主要な施設がいくつか町に建設中であつたりして復興に向けて進展がみられたし、漁業も遅々とはあるが回復しつつあつた。社会基盤の再建に向けては日本の各地のNPO法人やNGOの関与が大きな役割を果たしている。

復興に向けての努力のうちでおそらくもっとも難しいことは、コミュニティを再建することだろう。3・11の被害で目にみえにくいものではあるが、修復に時間がかかる被害のひとつが地域住民の絆が寸断されてしまったことであろう。家族や親類の絆そして近所の人たちとの付き合いが失われた。我々が訪れた地域で支援活動を行っているNPOやNGOの多くと話をしたがコミュニティのなかで信頼関係を築き上げることが支援することはそのコミュニティに活力を与える助けとなり重要な部分であると語ってくれた。はなしの文脈はかなり異なるが、これはアフリカ大陸において活動する救済組織、開発機関の経験とも共鳴しあう。日本における問題の在り方や社会経済的な構造はもちろんアフリカの置かれている環

境と際立って対照的であるが、災害や復興の状況における社会的なダイナミズムは同じである。日本は非常に発達した社会的セーフティ・ネットや3・11で生じた問題を処理する精巧で緻密にできた機器をもっている。そして災害後の復興の努力の経験を通じて国際的にも多くの社会にむけて重要な教訓を発信することができる。

3・11の東日本大震災は日本に世界の目を向けさせた。災害の規模、そして東北地方の復興努力の広がりには国際的なコミュニティからの多くの善意を集めた。私は地震の衝撃のすぐ後、災害の影響をこの目で目撃する場にいた（私は二〇一一年五、六月の短い期間、宮城県石巻市でボランティア作業を行う機会に恵まれた）。そして、二年後に復興過程にある東北を訪れることができた。たとえ日本人でも、このような経験をした人は少ないだろう。実際、私の国、南アフリカのだれも災害にあつた地域がどんな状況であり、そこに実際に立ったときどう感じるかなどを推し測ることはできないであろう。私は、この滞在中、豊かでユニークな経験をする事ができた。そしてまたすぐに日本に戻ることを楽しみにしている。